

# 近世後期、加越能の抜け荷取引湊の廻船問屋展開と 富山売薬商の抜け荷売買

深井 甚三

(1998年10月20日受理)

On Management Development of a Ship Wholesaler of Place that Deals Contraband Goods in Kaga-Noto-Etyu Area and Contraband Goods Trade of Medicine Peddling of Toyama in the Latter Half of the Latter Edo Period.

Jinzo FUKAI

**キーワード**：抜け荷、港町、廻船問屋、富山売薬、薩摩藩

**Key words** : Contraband, Port-town, Ship wholesaler, Medicine peddling of Toyama

## はじめに

筆者は、これまで近世後期の日本海沿岸地域を主とした物流と運輸の解明のために、地域内での小廻船の動向と湊町発展につき検討を加えた。また、特権の市場関係を動揺・解体させる非特権の物流・運輸のあり方を、富山売薬を対象にして、彼らによる薩摩への昆布輸送と抜け荷の購入・輸送について検討を進めてきた。昆布・抜け荷輸送については、薩摩組など売薬商が使用した廻船につき、その廻船規模・航路・船員雇用など廻船の実態について具体的に検討を行った。また、北前船の展開の背景には農民的商品経済の展開があるとしても、有力な北前船主の行動をみると、北前船展開の一要素として抜け荷が無視できないことを銭屋五兵衛の存在に加えて、越中の幕末の代表的廻船主綿屋彦九郎家が文政末年に薩摩との昆布輸送、抜け荷取引を行っていたことを示して指摘した。さらに、もう一つの抜け荷取引については、文政末年の綿屋の廻船が行った抜け荷取引とその

輸送した商品を示すとともに、嘉永期における薩摩組の抜け荷取引の概要についても具体的に明らかにした<sup>(1)</sup>。

しかしながらこれまでの検討では、さらに史料を探して検討を深めなければならない不十分な点が多い。例えば、抜け荷取引について、抜け荷品売却による収益の全容も含めて解明する必要がある。また、北前船の展開と抜け荷の関わりについては、多くの事例を発掘するだけでなく、湊町などの廻船問屋や関連業者についても明らかにしていく必要があるし、さらにこれを薩摩藩の抜け荷取引全体の中で位置づける必要がある。

そこで、本稿では、薩摩から列島各地へ流れる抜け荷について<sup>(2)</sup>、抜け荷売買が行われる場合、北国の中でも未だ十分な検討のない加賀・能登・越中における抜け荷取引の湊町の把握と、これらの場の位置づけに注意しながらその関係業者をみることにしたい。抜け荷取引には北前船主だけではなく、一般に廻船問屋も当然に関わることから、直接に抜け荷に関わった廻船問屋・北前船主の事

例を発掘したい。とりわけ富山城下の外港のため注目される東岩瀬では、幕末の有力廻船問屋の北前船主が、富山藩に加えて、薩摩組やその有力売薬商と密接な関わりを持っていること、また同家がこの関係をもとに天保期に急激に経済的發展をとげたことを具体的に示したい。そして、以上の検討のうえで、抜け荷品売却による利益の実態は明らかにできないものの、幕末に富山売薬の薩摩組が買い入れた抜け荷の実態と、その売却についても示したい。もちろん、薩摩藩の抜け荷品の流通上における富山売薬・富山商人の位置づけのためにも、薩摩組が扱う抜け荷が薩摩藩扱いの抜け荷の中でどの程度の割合を占めるか、その位置を把握することにしたい。

## 一、抜け荷品の取引湊

### 1. 能登・加賀の抜け荷取引湊

長崎奉行久世広正が出した天保中頃の年月未詳の申上書によると、薩摩藩の抜け荷取り締まりを実施するには、薩摩藩と松前藩の取り締まりに加えて、北国辺取り締まりとともに、「御府内並京大坂伏見堺等産物出所糺之義」が必要としている<sup>(3)</sup>。大坂・京都・堺・伏見・江戸が重視されるのは、正規商品に交えて抜け荷を売り捌けるためである。文政十三年（一八三〇）十月に越後俵物請負人泉屋弥兵衛は、俵物密売買の場所として新潟の他に出雲崎尼瀬町・石地駅（幕領）、宮川駅（井伊右京亮領）、椎谷駅（堀近江守領）を書き上げている<sup>(4)</sup>。天保四年（一八三三）の普請役調査により海老江辺も薩摩船の俵物密買地と指摘されているが<sup>(5)</sup>、抜け荷摘発や収公などからみて、後期における薩摩の抜け荷の北国における主捌き口は新潟である。天保七年と十一年の抜け荷摘発や川村修就が作成したとされる報告書「北越秘説」によると<sup>(6)</sup>、新潟の抜け荷関係者は、中心が長岡藩の御用商人でもある廻船問屋の高橋（津軽屋）次郎左衛門と当銀屋善蔵であった。関係した廻船問屋は他に田中屋源左衛門・若狭屋市兵衛・北国屋敬次郎などがおり、また付船宿では佐藤屋嘉左衛門も明らかになっている。廻船問屋・付船宿から商品を購入した商人は、薬種商加賀屋専助

を始めとする新潟の多数の商職人に加え、越後の小荒川村・中条町・下興野新田・五泉の商人や、越後外でも善光寺・松本・高田・富山・越中高月・上州一ノ宮村の商職人・売薬商がいた。加賀屋は朱も扱っており、会津で薬種を買い集める新潟古洲崎町庄之助へ朱一六本を売却している<sup>(7)</sup>。この朱は、会津以外にも加賀・能登・信州へも売却されていたことが「北越秘説」に記されている。新潟は、俵物産地の蝦夷地ととの中間地点になるだけではなく、その抜け荷販売は隣国の越中・加賀・能登・信州や出羽、上州の関東にも及ぶものであったが、さらに新潟は広大な販売市場の江戸と同周辺への中継地にもなり、抜け荷商品を生産できる場であった。

この天保十年七月に水野忠邦から勘定奉行明楽茂村宛に渡された探索書<sup>(8)</sup>によると、抜け荷を積む薩摩船は「長州之赤間関江着、船夫より北国筋江目差乗下候ものは、石州浜田・雲州辺之湊々ニ而少々抜売いたし能登輪島江入津、同所ニ而薬品其外琉球朱専ら有」という。以上は風聞によるものであるが、浜田で抜け荷取引が行われたことは、天保九年に浜田藩が浜田の廻船問屋の子、会津屋八右衛門を利用して竹島で抜け荷取引を行って処罰された著名な一件で明らかである<sup>(9)</sup>。右史料には、薩摩船が入津する輪島には薬種・朱が売買されていると記すが、これに続く割注の後は次のように記されている。

加州越中辺よりも同所へ罷越金銀ヲ以交易致し候由、尤越中東あいの町茶木屋清兵衛・もろ屋久兵衛与申もの薬種渡世致し候故、都而薬品類者右兩人ニ而万端引受売捌候由相聞、其外唐物類同国つつみ町米屋喜兵衛・二杉屋久兵衛・黒瀬屋六右衛門・尾島屋喜兵衛与哉申ものとも、兼而其利潤有之儀を心得渡世同様いたし、品々買受売捌候由

富山の薬種商らが薬種など唐物を買付けに輪島に来ていることが記載されているので、薩摩船などが薬種・朱を輪島にもたらしていることになる。

この天保期に加賀藩は、上方でなく蝦夷地へ廻米を積極的に行うようになっており<sup>(10)</sup>、しかもロシアへ米二万石売却を認めている嘉永七年

(一八五四)の著名な記録を家老前田式部が残している<sup>(11)</sup>。天保期の藩政は錢屋五兵衛を取り立てた奥村栄実が掌握し、また天保十四年末よりの黒羽織党政権期にも北方に米売却が行われていたところからみて、この時期の加賀藩には抜け荷の黙認状況があった。このため天保期の輪島での抜け荷取引は単なる風聞として片づけられるものではない。

新潟やさらにその東へ向かう薩摩廻船が寄港する港町として、能登では避難港でもある福浦が最も有名であるが、この福浦の客船帳になぜか薩摩船は登場しない。佐渡屋の『諸国客船帳』<sup>(12)</sup>は近世からの客船を記載するが、薩摩船は明治になってから登場する。また、福浦の入津船を記載する「毎年大例祭神船簿」<sup>(13)</sup>にも薩摩船は記載されていない。このため輪島に唯一残されている宮野屋の客船帳をみると、年次不明であるが、薩摩の田良一艘、かせ田一艘の廻船を確認できる<sup>(14)</sup>。

「北越秘説」によると、新潟の抜け荷の朱販売先は会津とともに漆器の産地輪島を抱える能登や加賀・信州があったが、天保十年七月に水野忠邦から明楽茂村へ渡された先の探索書には、「此輪島と申場所者一般ニ朱塗細工物渡世いたし候趣ニ而仕立候もの至而不用器用ニ候得共、朱塗物者宜由ニ相聞候」と記されている。輪島は漆器産地で、しかも朱塗り製品に朱をおおいに必要とする土地である。文化二年(一八〇五)四月に、同町の塗師屋が所持している朱紋柏を羽咋郡兵庫村で水銀生産の原料に使用すると、藩は同村忠三郎へ独占的に売却するように申しつけている<sup>(15)</sup>。このように輪島では文化年間になると相当に朱を使用しており、このため薩摩船が輪島で朱を売却することがあってもおかしくない。ただし、前記のように能登では新潟から抜け荷の朱を入手していたとされている。しかし、薬種の場合、直接に薩摩から入手していた富山の商人も、新潟の前出抜け荷摘発にて同地で薬種を購入して捕縛されており、新潟から調達以外に輪島へ直接入る抜け荷がないとはいえない。そして、安政四年(一八五七)の輪島の他国より移入品書上には薬種があげられているが<sup>(16)</sup>、この輪島の薬種問屋、久保屋喜兵衛は早くから大坂へ進出し、文化初年の史料に先

年に薩摩藩などの蔵屋敷銀方を務めていたと記している<sup>(17)</sup>。また、同家は塗り物の販売もしており<sup>(18)</sup>、朱の扱いも前出新潟の加賀屋のようにおおいに考えられる。以上により、輪島の薬種問屋が、入港する薩摩船やその他の国の船から朱やさらには抜け荷薬種を入手することがあってもおかしくないと考える。

前述探索書の輪島に関する記事によると、輪島に入る薬種は富山の茶木屋清兵衛ともし屋久兵衛がすべて扱い、他の唐物もやはり富山商人が売買するという。ただし、加賀からも購入に来るというので、後者は独占的に富山商人が扱うというわけでもない。薬種も薬種問屋の久保屋喜兵衛家があるので、富山商人の薬種買い付けは久保屋を通した可能性が大きい。なお、能登は俵物の産地であるが、輪島での俵物の密売買については不明である。

輪島以外の加賀・能登の湊であるが、安政五年の加賀藩領湊町の書上によると金石(宮腰・大野)・安宅・所口が薬種を輸入品とする湊とされている<sup>(19)</sup>。新潟のように、広域への売却を考えた大規模な抜け荷扱いは考えられないものの、幕府領も含む能登・加賀の他の湊にも、加賀藩とその支藩の売薬商などの商人へ回す薬種・朱扱いについては、特に天保期については検討する余地がある。

## 2. 越中の取引湊

薩摩組の場合、仕入れた抜け荷は組内で処理するほか、薬種などは富山城下と領内で処理も可能であった。輪島で薩摩船が売却した抜け荷は、加賀と越中、とりわけ富山の売薬商らが購入することを先の探索書が記載していたが、前記した引用に続いて、次のように記載している。

一体同国富山之儀者薬種類渡世致し候もの多有之、江戸京大坂ニ引続候薬店有之由ニ而手広売捌候由、尤近來者三都之買入方相減、當時者以前之半減之商売向ニ有之由候得共、隠荷物等多分相廻り候より姦商共自然同所江相集り抜荷専ら買受候由

右によると富山は三都に次いで薬店が多い土地であるが、この天保期は三都から薬種買い入れが以前の半分になっていること、そして隠荷物が出

回り抜け荷買いの商人が富山へ集まってきているとする。薬種買い入れは主として大坂からするが、安永期における大坂の薬種仲買仲間の調査では、富山商人の買い入れが判明する分は少ない<sup>(20)</sup>。このため天保期を相当に遡る前から、大坂で正規に買い入れする薬種が少なくなっているのは間違いない。問題は天保頃に他国商人が抜け荷を富山へ購入しにきているかである。後の節で示す薩摩組関係の分ではとてもそのような商品量は考えられないが、輪島その他からの仕入れも考えれば、他国商人へ提供できる抜け荷品がまったくないわけではない。しかし、幕府に対して慎重な対応が一段と要請される、外様大名加賀藩前田家の支藩としては、遠方の町ならいざ知らず、お膝元の城下で多数の他国商人が抜け荷売買をするような抜け荷横行を認めることは考えにくい。このため富山は、新潟のような他国商人も買い集めに来るような抜け荷売買が盛大に行われる町となっていないとするのが妥当である。

次に前記史料に輪島での薬種購入は、茶木屋清兵衛とも屋久兵衛の二人が引き受け、他の唐物類は米屋喜兵衛・二杉屋久兵衛・黒瀬屋六右衛門・尾島屋喜兵衛が売買したとする点にふれる。茶木屋は富山城下の代表的売薬商であり町年寄でもあった。このため名前が登場してくるとみなすこともできる。実際に同家が輪島での抜け荷薬種売買に直接乗り出していたかどうかとなると、史料の発見をまたねば結論を出せない。薩摩船の主たる抜け荷品売却先は、蝦夷地産俵物・昆布を入手できる新潟であって輪島ではないので、輪島で売却される抜け荷品は数量・金高ともに限りがある。薬種外の唐物を輪島で米屋ら富山商人が買い付けたとしても、そう多額の取引になるとは考えられない。

さて、売薬は富山藩だけでなく、加賀藩では越中東部の場合、東岩瀬・東西水橋・高月・滑川の町場とその周辺に、また越中西部は高岡・小杉や射水郡の農村部などで売薬業が盛んであった。つまり、これらの地域へ薬種を供給する薬種商、売薬業者の中に抜け荷薬種を調達し、販売する者が考えられる。天保七年の新潟で抜け荷取引が摘発されたが、このとき捕縛された者の中に高月村の

家持清次郎もいた。清次郎は、高月村の代表的な売薬商の高田屋清次郎とされているが<sup>(21)</sup>、「唐物抜荷一件、沢野氏手記」(新潟市郷土資料館蔵)には清水屋清次郎と記載されている。ただ高田屋が清水屋の変名を使っていた可能性も大きい。

高月同様に売薬業の盛んな前出の町々はいずれも湊町で、東岩瀬は富山の外港でもあった。他国の船がこれらの湊町・浦町へ抜け荷を持ち運ばなくとも、その町の廻船が積み込み、地域の薬種商・売薬業者へ販売することを考えなければならない土地であった。前出、文政の神速丸は、東岩瀬の廻船問屋に抜け荷を輸送する途中で難破したが、幕末の東岩瀬は薬種が他国からの入津品として書き上げられている土地である<sup>(22)</sup>。嘉永に抜け荷取引を始めた薩摩組は、抜け荷唐薬種を内陸輸送により富山へ運んでいたが<sup>(23)</sup>、国内産の薬種の名目で東岩瀬へ入津する唐薬種も大いに考慮される。残念ながら東岩瀬の住民が、神速丸一件と薩摩組以外の関係で抜け荷に関わって登場する史料は見いだしていない。

他方、薩摩船の場合は、帰り荷に俵物・昆布を仕入れる必要があるので新潟へ向かった。越中は能登のような俵物産地ではないが、一部の廻船は東岩瀬に寄港して、富山の商人と取引した可能性も考えなければならない。東岩瀬へ入る薩摩船は、唐薬種の売却が容易であり、天保段階であれば越中の廻船が蝦夷地から昆布の仕入れを行うようになっており、これを購入するようにすれば新潟へ向かう必要もなくなる。天保期に蝦夷地で昆布を仕入れ薩摩へ運送した栄久丸は、天保八年「買仕切帳」<sup>(24)</sup>によると、同年に昆布を松前の問屋上田(近江屋忠右衛門)らから購入している。長者丸も翌年に上田で昆布を買い付け、難破して天保十四年にシベリアから帰還した際に船員が宿にしたのもこの上田、近江屋忠右衛門であった<sup>(25)</sup>。富山売薬商による昆布買い付けの関係で松前の廻船問屋との関係は深められており、蝦夷地への北前船が活発な活動をみせていた天保段階であれば薩摩船は東岩瀬で帰り荷の調達も可能であった。

一方、越中西部の場合であるが、砺波射水水平野の物資移出入の窓口になっている湊町伏木の場合、鶴屋市左衛門は薩摩との抜け荷に関与した可能性

が高い。浜田の清水屋の客船帳<sup>(26)</sup>には、伏木の至徳丸、鶴屋市左衛門につき、「文政七申九月朔日さつま下入津、四方網屋源三郎様便船ニ而御乗居被成候」の記載がある。文政七年（一八二四）九月に、至徳丸が薩摩から下りの航海で、浜田へ入津したと記載している。この時期に北陸の船がわざわざ薩摩へ出かけていたということは、薩摩へ昆布を廻漕し、帰りに唐薬種を積み込んでいく可能性が極めて高いことを意味する。さらに上の記事によると、富山藩領四方の網屋源三郎も乗船していたとする。四方は富山藩の湊町である。網屋は、右客船帳によると、文化十五年に清水屋に入津しているので船頭であり、彼が文政七年に鶴屋の船で薩摩へ出かけていたことは、昆布輸送に取り組むために鹿児島へ出かけた可能性が高い。

さて、鶴屋市左衛門であるが、清水屋の客船帳には他に登場せず、また他の客船帳にも名前を見つけれず、よくわからない人物である。この鶴屋という同じ屋号に伏木の代表的廻船問屋鶴屋善右衛門がいる。地名の屋号ではなく、鶴という屋号からみて、鶴屋善右衛門の分別家のように考えられるが、名前を市左衛門に立てて、実際は至徳丸が善右衛門の廻船ということがないとも限らない。

この鶴屋善右衛門は、元来、伏木の筆頭に立つ廻船問屋であった。寛延二年「伏木問屋定諸口銭庭定書品々帳」<sup>(27)</sup>には八軒の問屋の筆頭に署名している。同家は慶応三年（一八六七）に伏木内で廻船所持が最も多い船主であり、九〇〇石・八〇〇石などの廻船計六艘も所持していた<sup>(28)</sup>。それ以前の廻船所持の実態はよくわからないが、温泉津の木津屋客船帳<sup>(29)</sup>によると、鶴屋善右衛門家は寛政期には八幡丸、文化年間には同船と自在丸の二艘を所持していた。慶応期の所持状況からすると天保以降の幕末に廻船所持を拡大していたことが推測できる。しかし、同家はなによりも廻船問屋であり、鶴屋市左衛門のものとされる廻船や網屋が積み込む荷を扱うことになる。売薬は小杉・高岡など射水地域でも盛んであり、唐薬種の需要は富山同様に大きく、この点で伏木へ廻船により持ち込まれた唐薬種もその売り捌きに不自由しない場であった。

なお、網屋源三郎であるが、彼についてはよくわからない。天保二年に銭札が発行され、このとき四方で多くの上層住民が銭札を出しており、その中に網屋庄助がいるが、源三郎との関係は不明である<sup>(30)</sup>。

## 二、東岩瀬の廻船問屋の経営発展

### 1、道正屋と薩摩組・能登屋

伏木とならぶ越中の代表的湊町で、しかも富山の外港で薬種が大量に入津していた東岩瀬の場合、薩摩組の富山売薬商などが薩摩へ昆布を運ぶために利用する廻船を出しやすい。また、東岩瀬は、他国廻船により入る唐薬種の場合、その取り扱いも行われやすい場であり、文政の前述神速丸は抜け荷の送り先を東岩瀬の廻船問屋としていた<sup>(31)</sup>。東岩瀬で抜け荷に関係したこの廻船問屋・廻船主を直接の史料から確認するのは難しいが、薩摩組と能登屋の昆布輸送に関わりを持ったことが判明する廻船問屋が存在する。この廻船問屋とは東岩瀬の幕末の代表的な廻船問屋道正屋久兵衛家である。以下、道正屋と薩摩組・能登屋の関係につき明らかにすることにしたい。

天保九年（一八三八）に薩摩へ昆布を運送する途中で、薩摩組の能登屋の持ち船長者丸が難破したが、天保七年に同じ能登屋の持ち船、栄久丸が薩摩へ売却する昆布を箱館へ買い付けに出かけている。その際に道正屋久蔵・久右衛門が便り船をしたことが、能登屋の天保八年「出入帳」に次のように記載されている。

	道正屋
入一、壱両貳歩	久蔵
のりちん取	久右衛門

道正屋久蔵は天保四年に道正屋へ養子に入り、当主久兵衛の妹と結婚して、別家久蔵家を興したが、彼は道正屋の船頭も務めていた<sup>(32)</sup>。薩摩へ昆布を運ぶのを目的とした昆布買い付け船に乗って蝦夷地へ向かうことのできる者は、船頭と親しいだけではなく、この廻船所有者の能登屋と相当に親しい者か、彼の許可を受けた者に違いない。

この栄久丸船頭の宇三郎であるが、天保八年に道正屋久兵衛、外四人が仲介人の出口屋久蔵へ出

した請証文によると、「魚屋宇三郎儀、近年橋本屋五郎左衛門船頭相勤」と記載されている。また、彼が栄久丸船頭として作成した天保八年の「売仕切帳」などの帳簿には橋本屋宇三郎の印を押している。宇三郎の請け人となった道正屋久兵衛の妻の実家はこの橋本屋であった<sup>(33)</sup>。さらに、道正屋の養子となっている久蔵は、魚屋又左衛門（あるいは又右衛門）の弟であり<sup>(34)</sup>、はじめ魚屋を名乗る宇三郎は、あるいはこの又左衛門家と縁のある者かもしれない。いずれにしても昆布船栄久丸船頭の宇三郎と道正屋は相当に関係が深く、このために道正屋の船頭らが栄久丸に乗船できたとみられる。こうした点から、箱館での昆布など買い付けに道正屋久蔵・久右衛門も関わっていた可能性があることを考える必要がある。なお、天保八年「売仕切帳」によると、栄久丸が仕入れた商品のうち笹目は道正屋がすべて購入していた。道正屋と薩摩組の能登屋とが親しい関係であったことが以上でうかがえるが、能登屋が幕末の富山大火の際に佐渡などで材木を買い付け、販売しようとした際に、商品価格について調べるために「聲を当分いわせ道久一間かり受御住宅」させたい旨を記す、年次不詳の書状も残る。

こうして、道正屋と密田家との関係の深さを確認してきたが<sup>(35)</sup>、嘉永期に薩摩への昆布輸送を行った栄福丸と同名の船が安政四年（一八五七）に道正屋の船となっている。浜田の清水屋客船帳<sup>(36)</sup>に、栄福丸が道正屋大治郎（七代目長男）の船として「安政四巳閏五月廿一日下入津」と記載されている。栄福丸は弘化四年（一八四七）から嘉永六年（一八五三）まで昆布輸送に従事していたことが確認できる船であった<sup>(37)</sup>。昆布輸送は、密田家の文書によると、同六年に順風丸、安政七年に神通丸が従事していたことが明らかである<sup>(38)</sup>。嘉永・安政期の薩摩組は昆布輸送に二艘の廻船を仕立てていたので、安政六、七年に栄福丸はこの昆布廻漕を行わなくなっていたと判断できる。さらに、慶応年間に道正屋は万徳丸という船を所持していた。万徳丸は出雲崎の泊屋の「御客入船帳」（新潟大学図書館蔵）に長次郎名義で慶応三年の三月九日入津として記載されている。問題なのは、薩摩組の「出納留」<sup>(39)</sup>の元治元年四月二六日の

「万徳丸船玉代」など配当の記事と同名の船であることである。道正屋は以上のように、薩摩組関係の廻船で、薩摩との交易の役目を終えた船を引き受けていたのである。

なお、道正屋が薩摩組の売薬荷物の輸送に当たっていたことを示す、亥三月十一日、能登屋林蔵出し送り状なども能登屋に残っている。この中に年不詳の「送り荷物控」がある。これは八幡屋久□□・宮島屋専助・同信次郎・北代屋政吉・大江千屋庄助がそれぞれ出した、タバコ荷物やきくらげ・きのこ・塗り物の各荷物を、東岩瀬の道正屋久兵衛とともに、能登屋勘助（薩摩組分か）・宮島屋千右衛門・小笹弥藤太・小西屋弥兵衛・大江千屋庄兵衛にそれぞれ宛てたものである。これには、船が来春越中へ向かうかわからないので、下関の北国屋に申十一月に積み荷を預け、別船で送付するかもしれぬ旨を知らせた書き付けが付けられている。荷はタバコ・塗り物などなので、薩摩からの荷物の可能性があり、また中に薬種があるか不明であるが、いずれの荷物も道正屋扱いになっていた。

以上により、道正屋久兵衛家が薩摩組およびその中心的売薬商の能登屋と極めて関係が深く、彼らの荷物扱いもする廻船問屋・廻船主であったことが明らかになったと考える。

## 2. 道正屋の経営発展

薩摩組・能登屋と密接な関係にあった道正屋久兵衛家は、幕末にこそ東岩瀬の代表的廻船問屋となったのであるが、元々そのような有力な廻船業者であったわけではない。

同家の発展の基礎を築いたのは、史料で確認できる限りでは、文化二年（一八〇五）生まれ、明治十八年（一八八五）死去の七代目久兵衛である。しかし、七代目の父、久平の時、寛政年間に持ち船を風波で破損した際に、道正屋は富山藩八代目藩主利謙の後援により船を修復し、船名を長久丸と改め、旗印に前田家の家紋の梅鉢を許されて、富山藩の手船に準ずる扱いを受けたという。この結果、同船は諸港を航海・交易して大収益をあげ、道正屋発展の基礎を築いたとされている。以上は、伝承により記述したとみられる『東岩瀬史

料』<sup>(40)</sup>の記事である。この伝承は、富山藩との結びつきをもって道正屋が廻船業を寛政期に大きく進展させていったとするが、東岩瀬など越中の廻船が北前船の活動を始めるのは文政以降である。そして、東岩瀬の廻船が蝦夷地から鯨肥を導入したのは文政五年（一八二二）を嚆矢とするとされている<sup>(41)</sup>。また、東岩瀬の天明五年（一九八五）書上によると渡海船四二艘があるが、船主に道正屋久兵衛の名前はなく、さらに廻船役銀記載のある寛政十一年役銀算用帳にも久兵衛はその記載がない<sup>(42)</sup>。廻船の名目所持者を立てる場合があるが、現在のところ寛政段階の道正屋はまだ廻船主になっていないようである。

道正屋の廻船の初見は、江差の「間尺帳」<sup>(43)</sup>に文政十二年（一八二九）六月に記載された福寿丸である。同帳には天保十三年（一八四二）五月二五日、福寿丸（船頭久蔵）、嘉永四年（一八五一）七月八日、長久丸（船頭六三郎）、慶応二年（一八六六）七月二九日、長久丸（船頭仁兵衛）が記載されている。福寿丸は実は共同所有の船で、天保四年に四五〇石の廻船購入のために橋本屋へ売却されたが、新購入船がすぐに難破したために、売却先の橋本屋の死去もあったので買い戻したことが記録から判明している<sup>(44)</sup>。道正屋は天保十年に大坂にて六〇〇両で富寿丸を建造し<sup>(45)</sup>、また、弘化三年には福宝丸も所持していた<sup>(46)</sup>。加賀藩は天保十五年に役銀を領内の有力廻船業者に賦課し、木谷藤右衛門を筆頭に二五人に賦課したが、道正屋は賦課されていない<sup>(47)</sup>。弘化期の道正屋は、三艘の廻船を所持したといっても、まだ廻船業者として新川地域での有力な存在とはいえない。しかし、所持廻船難破からわずかな期間で二艘目を新造し、さらにすぐに三艘の廻船を所持するようになるのは、天保四年以降に急激に蓄財が行われていたことをうかがわせる。

安政五年（一八五八）の東岩瀬の書上によると<sup>(48)</sup>、道正屋は二番目に多く廻船を持ち、四艘を所持（三五〇石一艘、八〇石三艘）している。この石数から明白のように、税負担を逃れるために過小申告しているとみられる。慶応三年（一八六七）の調査では、東岩瀬では道正屋大次郎名義で筆頭の所持者となっており、六〇〇石二艘、四五〇石

一艘の三艘を所持していることになっている<sup>(49)</sup>

天保末年に廻船主として急激に成長していた道正屋は、嘉永七年版「見立角力三ヶ国長者鏡」<sup>(50)</sup>によると、二段目の前頭に記載されており、この時期には領内でも東岩瀬第一の富裕廻船業者として知られるようになっていく。このように道正屋が富商として評価を受けることになった背景には廻船所持があっただけではない。松前の海商が組織した講、千島講の嘉永三、四年頃の「千島講宿帳」<sup>(51)</sup>には問屋として道正屋久兵衛と日方郷屋吉左衛門がでるように、道正屋は廻船問屋としてもこの時期に東岩瀬の代表的業者となっていたのである。

道正屋は廻船問屋として多角的な商売にも乗り出していた。安政六年の新川郡の職業調査<sup>(52)</sup>によると、道正屋久兵衛は諸廻船問屋・渡海船持・肥料商売・綿商・蠟鉄砂糖商・木綿綿商を営んでいる。安政期に同家は高収益をあげる肥料など多様な商売を行っていることからわかるように、東岩瀬きっての廻船問屋の廻船業者であり、富裕商人である。なお、砂糖は薩摩の産物でもあるが、同家が薩摩船との直接取引を行っていたか否か、また薩摩から持ち下った廻船との取引がなされていたか否か、極めて残念ながら不明である。いずれにしても廻船所持の動向からうかがえるように、廻船業者として急激な成長を天保末以降にみせた。この始期となる天保七年には前述のように道正屋久蔵らは、薩摩へ運ぶための昆布を仕入れに蝦夷地へ向かった栄久丸に乗船していた。これは乗船する廻船との関係からすれば蝦夷地での昆布確保のための蝦夷行きと考えるのが自然であるが、残念ながら蝦夷地での彼らの動向をうかがわせる史料も未見である。

最後に、道正屋と富山藩との関係についてふれておきたい。『馬場海運史』二章に富山藩主の御供揃にて遊船をした際の道正屋所蔵の文書が紹介されている。それには「船順の儀千歳丸、万寿丸、万徳丸、福寿丸と順列被相定」と記載されている。福寿丸は弘化三年に難破した道正屋の船である。この福寿丸は富山藩主の遊船にも動員される特別な扱いを富山藩から受ける船であったことは間違いない。前出の伝承では寛政期に道正屋の廻船長

久丸が手船に準ずる扱いを受けたことになっているが、東岩瀬の記録では、先にみているように寛政十一年段階に廻船を所持していなかったため、あるいは伝承の手船に準ずる扱いの船とは長久丸ではなく、この福寿丸なのかもしれない。いずれにしても弘化三年を遡る時期に道正屋が富山藩より特別な扱いを受けていたとみて間違いない。

### 三、薩摩組の購入抜け荷

天保以降の薩摩組の能登屋や薩摩組は二艘の廻船で昆布を薩摩へ運んでいたことが明らかになっている。天保八年の能登屋は栄久丸で献上分一万斤以外に四万五六三七斤（「売仕切帳」）を運び、嘉永二年の薩摩組の栄福丸は献上一万三二〇斤余以外に四万八〇五三斤と折昆布五四把を運んだ。単純に献上外の輸送昆布を二倍とすると、天保・嘉永の時期は二艘でおおよそ献上分を加えて一〇万斤を薩摩へ輸送したことになる。薩摩藩の中国輸出昆布は公式統計で、天保十二年で三〇万斤、嘉永四年一〇万四〇〇〇斤、同五年二〇万斤<sup>(53)</sup>であるが、弘化四年以後の三年間に薩摩藩が琉球へ送った昆布は、各年、四〇万七二七〇斤余、五〇万五三二九斤、四四万五四七〇斤余である<sup>(54)</sup>。五〇万斤としても二割も占めることになり、薩摩組関係の昆布船による昆布調達の役割が大きかったことがわかる。

天保十四年以降の薩摩藩は、新潟での抜け荷取引に代わる他の抜け荷市場の開拓が求められていた。この点で富山売薬薩摩組の利用価値が一段と増すことになっただけに、薩摩組の扱う抜け荷がどの程度のものであったか、重大な関心事となる。

予め琉球口より薩摩に入る唐物の全体を把握する必要があるため、その嘉永五年分を下に示した。（ ）内は天保十二年分である<sup>(55)</sup>。

反物 氈條<毛布>一二〇〇斤（一八〇〇斤）・織絨<厚手の絹か毛織物>二〇〇疋（二〇〇疋）・羽毛絨<毛織子>六〇〇丈（〇）・中花綢<中型模様付き羽二重>五四〇疋（三一二疋）・雛紗<クレープ>二四〇疋（二二八疋）・中葛布九〇〇疋（四八〇〇疋）・哆囉呢<大幅羅紗>三〇〇丈（〇）

・嘩噓緞（サージ）二四〇〇丈（二六二五丈）・中西洋布<洋製金巾>九〇〇疋（四三〇疋）・粗夏布<粗麻布>一四〇〇疋（一六八一〇疋）

薬種など 薬材六四五一〇斤（前年二九二一七斤）・丁香<丁子>前年四六〇〇斤（不明）・水銀六〇〇斤（五五〇〇斤）・粗磁器一〇六二〇斤（六九九〇〇斤）・白糖一三三二五斤（五一四三五斤）漆茶盤<茶盆>四六二五個（一〇一二五個）、漆箱そのほか他種類商品

また、嘉永七年（一八五四）三月の鹿児島大火では産物方御蔵が焼失し、焼失した蔵の唐物が判明するので、それを示すと、羅紗（五九八本一切と四丈二尺）・碑岐（三三八疋七丈七尺四寸）・鳥毛緞（一四五本）・鳥毛紗（一〇本）・鳥毛綸（七本）鳥毛縮（一本）・八糸緞子（一本）・西洋布（一一七六疋八丈七尺）であり、「八万両程御損失」であった<sup>(56)</sup>。以上の反物は、高額な鳥毛関係織物や羅紗その他の高級繊維品であった。

なお、天保十年より禁止された薩摩藩による琉球産物の長崎売却が弘化三年（一八四六）より許されたが<sup>(57)</sup>、この嘉永六年の産物方の保管唐物を、同二年の長崎の販売分も加えて表1に整理した。同表によると、前年に輸入された前記薬材の総量にほぼ対応する六万二〇〇〇斤ほどの保管薬種がその翌年の産物方にあり、このうち、一六種

表1、嘉永期、薩摩藩の長崎売却薬種と保管薬種

同 法 六 年	商 品 名	同 法 六 年
年 産 内 物 方 保 管 用	龍蝦1696斤、阿膠1122斤、辰砂107斤、茶碗葉481斤、木香2318斤、明砂719斤、大黃2011斤、耳松1239斤、沙口126斤、耳草2313斤、犀角461斤、虫糸1190斤、桂皮4670斤、山糯米1万6075斤、蒼朮1841斤、象牙115斤	巴豆423斤、水角635斤、肉桂114斤、肉苁蓉99斤、木鼈子196斤、沒藥71斤、血竭215斤、乳香624斤、雄黃512斤、水銀1589斤、胡椒660斤、砂1137斤、鉅丹1081斤、羚羊角18斤、大楓子18斤、角先1546斤、杜仲60斤、山奈331斤、板樟712斤、穿山甲225斤、花紺青66斤、木瓜174斤、延胡索179斤、大腹皮297斤、連翹27斤、肉豆蔻60斤、遠志56斤、丁子2945斤、佛手22斤、紫蘇紙2789斤、酸棗仁40斤、使君子109斤、猪苓53斤、貝菜葉187斤、白姜52斤、本掛人參1107斤、山出人參847斤、益智仁52斤、草薢10斤、蘇木1642斤、雄黃3450斤、石膏1508斤、唐薑199斤、良姜161斤、麻黃557斤
	犀角161斤8合（112貫139匁余）・虫糸100斤（55貫446匁余）・竜蝦683斤6合（216貫632匁余）・沈香500斤（14貫395匁余）・茶碗葉56斤1合5（80匁余）・象牙501斤8合（27貫52匁余）・明砂1623斤6合（46貫743匁余）木香5000斤（43貫200匁余）・蒼朮2403斤（7貫170匁余）・桂皮1万2665斤2合（66貫238匁余）・甘松5522斤（6貫695匁余）・甘藷5971斤8合（59貫897匁余）・大黃7000斤（6貫590匁余）・山糯米1万9998斤（111貫788匁余）・阿膠447斤（17貫261匁余）	

備考、「琉球産物に長崎立並本手品利潤総帳」「産物方在合之薬種書付」（島津家文書・東大史料編纂所蔵）による。



以外の四五種もの薬種で、総量二万五〇〇〇斤余が長崎販売外の分となっていた。

天保期の抜け荷品の重要な販売先であった新潟についてもみておくと、前出「北越秘説」は、販売されていた抜け荷品が薬種類（数品）・唐更紗類・毛氈・珊瑚珠・光明朱・唐瀬戸物類（「沢山ニ有」）であったとする。天保十一年に摘発された新潟の薬種商加賀屋専助の場合、同九年九月より大黄一二七八斤九合・甘草一六五七斤五三三三・桂枝一〇五斤一分・麻黄六五斤六分二五・石膏四七九斤六厘二五を売却している<sup>(58)</sup>。取り扱う薬種品数はやはり少ないが、加賀屋一軒だけの販売分と表1に示した長崎への関係薬種売却分を比べて考えると、やはり天保期の新潟の抜け荷扱い量が相当に大きいことがうかがえる。

薩摩組が実際にどのような抜け荷品を購入したか判明するのは、嘉永五年（一八五二）と同六年のことであった。それぞれ表2、3に整理した。嘉永五年の史料は、「中間方買入座」「別段方買入」「反布方」「諸色取入座」「諸雑用方」の区分があり、前二者が薬種購入、「反布方」は反布、「諸色取入座」は諸商品の購入についてのものである。

薩摩組の購入は当然ながら薬種が主となる。嘉永五年は購入品の九割近くが薬種となっていた。

表2、嘉永五年の薩摩組購入品

1 薬種	白58斤余、山90斤余、木32斤余、丁180斤余、角3本、水角16本 <89.4パーセント> (3852貫861文)
2 反物	紋紗2本、けんちう4反、飛色羅紗1本更紗2（疋） <5.0パーセント> (217貫508文)
3 諸色 和服一式仕立	浅黄嶋1反、めんわう2反、帯仕立用雪晒1丈、帯仕立、白羅紗切・黒羅紗切れ1つ、□の切1つ、産織羽織用一着分・しん木綿、仕立て代、香櫛1 (31貫992文)
茶道具	掛け物1幅茶入返上取合、唐物の襷紗2枚・字掛け物3幅、唐画掛物1幅、鉄茶釜1、茶入2つ、茶杓2本、茶入取合8つ、茶出し1つ (56貫757文)
陶磁器	水さし角丸2つ、水さし1、茶碗2つ、中皿9枚・蓋1つ、盃10枚・小鉢枚、茶碗一ぜう鉢1枚・井1つ・小井9つ、□鉢1つ、水茶碗5つ、紺絵茶碗14束、白焼茶碗20束、油下皿、南京鉢1つ、此の台1つ、大押鉢1つ、二つ重蓋1組、中皿5つ、蓋5つ取合、焼物の差1つ、押鉢1枚、南京焼片1つ (67貫362文)
細工物	立入□折□箱・火かこ4つ、作□□1本、鉢入箱1つ、足御台箱1つ、雁の□櫃1つ、龜甲簾1枚、石鉢5つ (66貫348文)
食品他	泡盛□24つ、塩から1斗、右入れ蓋1、からすみ、□当せんし6斤8分7勺5才、同5斤6分825、大官香、中官香、菜仙香 (16貫30文)
合計 4308貫 858文	

備考、「大宝恵」による。

表3、嘉永六年の薩摩組購入品

海南布29反、山東絨3反、白羅紗切、横3勺4寸6分 黄ピロウド2丈7勺、同4つ割、同幅、海南布20反、黒ピロウド6丈3勺5寸、黒□羅紗1本、鶴せん1枚、同1枚、納戸羅紗1本 白袖広坂長物1疋、鼠色緞子1本、毛氈20枚、山東絨1反 海南布1反、こんとん7丈5寸、宮沙形部1疋、花織め・布1引き 赤ばしかふ29反、上物ばしよ島5反、白袋入紺羅紗1本、□□織1本 中□□□2反 <881貫198文> (26.5%)
押鉢1枚、黒夏目1、袖□同1・薄茶碗7つ、押鉢1枚・中皿10 南京ふか出し1つ、乾山菓子鉢1つ、薄茶碗1つ、小皿9つ、茶碗井口20 八□形改物碗1束、小丸盆50、菓子碗50、三つ入子重1組、二人井当2、 朱丸形吸物碗30、大菓子盆40、1人井当2、折・箱15、 押鉢箱1、菓子盆箱8、吸物碗箱8、白砂糖入箱1、白水箱1 <59貫940文> (1.8%)
太白砂堂（糖）65斤、餅こり、太白砂糖、正味60斤 梅の落焼2斤、同油1斤、右入蓋2つ <65貫363文> (2.0%)
白50斤、ふたのい30斤半、赤62斤、山18斤9合375、大34斤半、角7本 <2314貫485文> (69.7%)
計 3321貫 586文

備考 船積み入用などは略す。  
「神通川魚釣之略」による。

他の商品では反物の繊維品が重要な購入品であったことが、購入額からわかる。同五年は五パーセントにすぎないが、それでも他の商品よりもはるかに購入額が大きく、同六年は二六パーセントほどにも及んでいた。

薬種の購入量を、表1の嘉永六年、薩摩藩産物方保管の商用分・内用分と比較してみると、明らかに薩摩組購入量はごく一部にすぎない。その購入品は白龍（白檀か）・山帰来（広東人參か）・丁子・木香・犀角・水角などとみられる<sup>(59)</sup>。天保の新潟の取り扱い薬種と比べると、薬種の種類数は変わらないものの、加賀屋の大黄・甘草・桂枝・麻黄・石膏と違っている点に特徴がある。文政一〇年に薩摩で購入した抜け荷薬種を積んで難破した神速丸も、広東人參・丁子・甘草・大黄・使君子・産山帰来を運んでおり<sup>(60)</sup>、一部に重なりがあるが、若干異なっている。これは薩摩組の場合、売薬の薬材需要を考えた仕入れのためであろう。

嘉永六年の場合、羅紗・ピロウド類や海南布・山東絨・緞子・芭蕉布なども計八八一貫文ほど購入されている。芭蕉布は明らかに中国産ではない。他の唐物の場合、羅紗以外はこの両年は連続して購入されていないが、二カ年のことなので一部を除き購入する反布とその分量に変動があるという程度のことしかいえない。金額からみて薩摩藩輸入品の一部の購入にとどまっていることは明白で

あるが、購入量も各反物類は少しずつの購入である。例えば、粗夏布の海南布は、嘉永五年に一四〇〇疋（二八〇〇反）の輸入に対して五〇反ほどにすぎない。諸色については、同五年の場合、茶道具・陶磁器・細工物（漆器含みか）・食品類他で、同六年の場合も分類的にはほぼ同様になる。ただし、五年にみられた掛け物のような茶道具が翌年にはみられないものの、陶磁器の中には茶道具とみられるものもあるなど、購入唐物の大事な分野に茶道具関係品がある。また、この茶器なども含む陶磁器も重要な購入品であった。一方、細工物・漆器とした商品は、琉球のものも含む。同六年の朱丸形吸い物椀は琉球漆器とみられるものであり、他の弁当や椀にも琉球漆器がみられると思うが、菓子盆など唐物も無視できない。いずれにしても金額的にはわずかな額の購入であった。なお、食品類は同五年と六年に同一商品がみられない。同六年の購入品の太白砂糖・氷砂糖は唐物とみられるが、前年には購入が知られない。これは価格の問題もあるので、一応未購入になったと考えられる。白砂糖は本来ならば毎年購入されてもおかしくない商品であろう。以上の諸色は、売薬商が購入目的の主商品でないためもあり、他品種を買い付け、また砂糖を除けばわずかな買い付けとなっている。

富山売薬が買い付けた以上の抜け荷品は、唐薬種、更紗・毛氈などの反布の繊維品や陶磁器などが新潟で売買されていた唐物とほぼ重なる。ただし、珊瑚樹や光明朱については買い付けがみられない。前者は細工物の、後者は漆器生産のともに材料として使用されるものである。神速丸は朱を購入していたが、嘉永のこの時に買い付けられなかった理由は明確にできない。また、以上の諸品の購入も、薬種と同様に薩摩藩が扱う抜け荷からすればごく一部にしかすぎないことは、前記の鹿児島島の火災時における反物類の損失八万両との比較からだけでなく、購入された反物やその他商品の数量からみても明確であった。

#### 四、薩摩組関係の抜け荷売却

薩摩組が鹿児島で購入した唐薬種やその他抜け荷品の売却を次に問題にしなければならない。購

表 4、海南布の分配

5月18日、	2本・・・妙藤寺様
6月5日、	2本・・・志甫伊
同	3本・・・内々取
同	1本・・・志甫伊
6月6日	10本・・・〇ト
6月9日	3本・・・鳥五
6月20日	6本・・・志甫伊
8月	1本・・・能勘
8月	1本・・・鳥藤

備考、「神通川魚釣之咄」による。

入した唐薬種は主として仲間内でまず処置するものとして、他の商品はどのようにされているであろうか。

この薬種以外については、嘉永六年（一八五三）に若干の商品の分配・売却とその代金がわかる。具体的にわかりやすい海南布について、その売却分を整理すると表4のようであった。この表に名前のでる商人は、鳥藤・〇トのように鳥羽屋や能登屋という薩摩組の売薬商とみられる者以外に、志甫屋や妙藤寺のように仲間外の商人なども交じている。志甫屋の場合は薩摩組外の売薬商の志甫屋ではないかと思うが、妙藤寺については不明である。つまり、唐薬種以外の一部の商品については、当初から仲間外の商人に売却されるものがあったとみられる。

次に、唐薬種の売却について取り上げる。

薩摩組が買入れた唐薬種は、仲間の家での需要をみたすのはもちろんのこと、他の売薬商や薬種商に売却もされた。この主要な販売先はいうまでもなく富山の売薬商・薬種商であった。富山の売薬商による富山内での薬種仕入れ先が具体的にわかる史料は、水上屋清二郎が嘉永四年六月にまとめた次の著名な史料があるだけである。ちなみにこの年は薩摩組として抜け荷品を薩摩で購入していた年である<sup>(61)</sup>。

#### 石州諸仕入之控

印一、三朱ト四百四十匁七分	茶木屋薬種代
九厘	
一、貳百七拾九匁壹分三厘	中屋薬種代
一、六百貳匁壹分八厘	油屋薬種代
一、貳ノ四百三十五匁	
一、金壹両ト百三十文	能登屋
(以下略)	

茶木屋は富山の代表的な薬種商であるが、中屋・油屋・能登屋はいずれも薩摩組の売薬商と同屋号であり、薩摩組の者とみられる。こうした仕入れ先の事情はおそらく他の富山の売薬商に共通するものであろう。富山の売薬商の薬種仕入れ先は、この時期には城下町の薬種問屋だけではなく、薩摩組の売薬商が重要になっていたのである。残念ながら薬種の売買値段は記されていないが、大坂・京都から正規の唐薬種を仕入れる茶木屋とみあうような値段設定になっているとみられる。もちろん、茶木屋も抜け荷唐薬種を扱うのであろうが、正規の薬種の値段から大幅に下げた価格で抜け荷薬種を販売することは、営業利益を目指した商売からみて考えられない。

## おわりに

文政期以降の薩摩藩の抜け荷売捌き地としては、長崎や大坂・京都・堺などの唐物取引地に加えて北国が主たる場となり、とりわけ通説のように越後の新潟が主販売先となっていたとみて間違いない。しかし、この新潟も天保年間に二度の摘発が幕府により行われ、天保十四年に幕府領となったので、その後の新潟での抜け荷取引は当然に下火になる。北国の加賀藩領でも、抜け荷の取引、売買が行われた場所として輪島と東岩瀬・伏木がとりわけ考慮される。東岩瀬は売薬が盛んな富山の外港で、伏木も富山同様に売薬が盛んな射水地域の窓口港である。一方、輪島は漆器生産用の朱を必要としたところで、天保期に新潟から抜け荷の朱を確保している。文政から天保の時期は、輪島への薩摩船による朱の持ち込みも考慮される。この点は史料的な確認が今後の課題であるものの、漆器販売も行う同地の薬種問屋久保屋は、元、大坂へ進出して薩摩藩へも融資をしていた商人であった。

さて、天保以降に薩摩藩の昆布調達のために、富山売薬薩摩組とその商人は非常に重要な役割をはたしていたが、天保十四年に新潟は収公され、抜け荷販売に支障をきたすことになった。このため抜け荷販売の面でも富山売薬商との抜け荷取引が一段と薩摩藩にとり重要になったことは間違いない。ところが、天保十年より差し止められた唐

物の長崎への売却が、弘化三年に五カ年を限り再び許されることになった<sup>(62)</sup>。とはいえ、市場の新潟を失った薩摩藩に富山売薬の重要性は依然として変わらない。こうした時期の嘉永初年に、富山売薬薩摩組が購入した抜け荷品をみると、薬種もそれ以外の抜け荷品も薩摩藩の輸入全体からするとそのごく一部なのはもちろんのこと、長崎売却分を除いた分でもその一部にすぎない。また、富山売薬が扱う抜け荷が、本稿でみた分以外にまだあるとしても、薬種以外の唐物売り捌きの力は富山城下やその外港東岩瀬の商人にあるとは考えがたい。薩摩藩の抜け荷売却には、広大な市場を相手にできる場で、しかも薩摩船が直接に抜け荷を持ち込みやすい場が重要となる。このような場として下関・大坂や、文政の神速丸が抜け荷取引を行った玉島などの瀬戸内の湊<sup>(63)</sup>があげられるが、特に俵物・昆布の安価な入手と薩摩への輸送ということでは下関が中継地として重要となる。ただ羅紗など高級反物の販売先としては、やはり依然として大坂・京都・堺・伏見など上方都市も無視できないのではなかろうか。

加賀藩領で抜け荷取引の場となった湊として、輪島とともにあげた東岩瀬は、抜け荷品の売買を史料的に確認できない。しかしながら、天保期に昆布輸送を手がけた売薬商能登屋と強い関わりを持った東岩瀬の道正屋は、この天保以降に急激に成長し、東岩瀬随一の廻船問屋、廻船主となっていた。道正屋は富山藩との関わりを持ち、また薩摩組売薬商の薬荷の輸送も行った廻船商であるが、能登屋の昆布船船頭の保証人になるだけでなく、道正屋の分家で船頭を務める久蔵が箱館へこの昆布船に乗ってでかけるなどして箱館・松前との商売関係をこの時に構築したとみられる。道正屋の直接の文書は見られないものの、抜け荷の売買による利益は同家利益内で占める割合は大きくないと考える。しかし、同家の富山藩との関係や昆布調達・抜け荷取引を行う薩摩組売薬商との強い関わりを背景にして、同家の天保以降の急激な経営発展があったことは間違いない。なお、道正屋と同じく新川郡の最有力の廻船商である滑川の売薬商小泉屋太三郎は、常陸那珂湊の廻船問屋の客船帳「嘉永・安政年代、廻船入津覚」<sup>(64)</sup>に名

前を出しており、持ち船を東廻りで航海させている。薩摩組の売薬商同様に廻船を危険な東廻りで航海させていた売薬商の廻船商ということになれば、当然に薩摩への昆布輸送が推測され、また同家の経営発展は能登屋と同一基盤の上に築かれていたことが予想されるものの、同家についてはさらに史料の補充が必要である。

本稿ではまた、越中西部の代表的湊町伏木の廻船業者鶴屋も文政年間に薩摩との取引に乗り出したこと、そしてこの鶴屋は伏木の代表的廻船問屋・廻船主の鶴屋善右衛門と関わりがあることにもふれた。先に発表した拙稿では、越中の代表的北前船主綿屋が抜け荷をこの文政期に行ったことにふれている<sup>(65)</sup>。同じ文政には越前の宝力丸もこの航海に乗り出していた<sup>(66)</sup>。前者は売薬商が関与したが、後者はそれが不明な事例である。いずれにしてもともに、薩摩藩が文政期に抜け荷取引に積極的に乗り出した際に、それに呼応して薩摩・蝦夷間の航海を行う取引に、北陸の廻船が呼応して関わったことを示すものではないかとみられる。

そこで、この文政期に薩摩へ昆布輸送を行い、帰りに抜け荷を積み込んだ廻船が、越前・越中以外にもみられること、つまり北陸の廻船が蝦夷地・上方間を結ぶ北前船台頭期に薩摩との航海を行うようになったことを最後に紹介したい。

出雲崎の熊木屋の客船帳「御客上下帳」<sup>(67)</sup>によると、下に示した廻船が「サツマ下り」「薩摩下り」と記載されている。

文政三年・・・加賀国湊・鵜屋長左衛門・・・

「外下り物色々御商被遊」

同六年・・・加賀国本吉・橋本屋十左衛門

同六年・・・加賀国湊・安田屋久太郎・・・

「芋半分四分荷被遊候」

同六年・・・加賀国湊・安田屋久太郎・・・

「芋半分四分荷被遊候」

同一〇年・・・加賀国湊・室屋長左衛門

同一〇年・・・加賀国湊・室屋長左衛門

天保二年・・・越後国早川・本間長次郎・・・

「芋五百俵余り」

同二年・・・加賀国湊・鵜屋市藏・・・

「芋千斗だいゝゝ玉六丁」

同二年・・・加賀国湊・鹿島屋佐右衛門・芋

同二年・・・加賀国湊・橋本屋茂助

同三年・・・越後国桑川・本間助右衛門・

「芋・橙・蠟・かつぶし・半切、五日新潟行き」

同四年・・・加賀国湊・魚屋間右衛門・・・

「蠟・太白」

この期間は文政三年から天保四年であり、薩摩藩が抜け荷に力を入れ初めてから、新潟での抜け荷摘発が行われる前までの段階である。この薩摩下り廻船の積み荷として抜け荷は当然に記載されず、薩摩芋・橙などが記されている。しかし、この時期の廻船がわざわざ薩摩芋・橙などを薩摩から持ち下るはずはなく、その下荷に抜け荷を積んでいるのは間違いない。上の廻船は加賀の湊を主にごく一部に同じ加賀の本吉や越後の早川のものがあつた。この薩摩下り廻船は、熊木屋の顧客に限定されるわけであり、このことは文政以降に薩摩から抜け荷を持ち下したのが越中廻船だけでなく、隣国の加賀の廻船も同様に存在したこと、また一部に越後の廻船も関わったことを教えてくれる。そして、これまでの検討から、薩摩藩が抜け荷取引に力を入れ、日本海側では新潟を主にしてその販売に乗り出した文政三、四年頃より、越中・加賀を主に越前・越後の廻船も、つまり北陸の北前船が薩摩への昆布輸送を行い、その帰り荷に芋・橙などの下荷に抜け荷品を積み込む輸送に乗り出したことがうかがえる。この文政初年は、蝦夷地から鯨肥を上方へ運ぶ北前船が北陸地域で活発な活動を始めた時期である。北陸の北前船は主としてこの蝦夷地・上方間の鯨肥輸送・販売に従事したものの、他方で昆布・俵物を薩摩へ運び、帰りに抜け荷を運ぶ廻船活動も行い始めたのである。しかし、天保以降には、北陸の抜け荷輸送廻船の場合、主要商品が唐薬種であった関係もあり、富山売薬など越中の売薬商と関係のもてる越中廻船が抜け荷船の主流になってくると考えられる。ただし、一方で、この天保期に加賀藩が米を蝦夷地・北方へ向けて販売するようにもなり、銭五のような廻船商が台頭したことも見落とせないが、加賀の抜け荷船については、あらためて別稿にて検討したい。

## 注

1. 拙著 a「北前船の抜荷」(『日本歴史』五八七号・一九九六年)・b「幕末期、富山売薬商薩摩組の抜荷取引の実態」(『日本歴史』五九七号・一九九七年)・c「富山売薬商の薩摩との昆布・抜け荷品輸送と廻船・飛脚」(地方史研究協議会編『情報と物流の日本史』雄山閣・一九九八年)他。
2. 薩摩藩の抜け荷については、山脇悌二郎『抜け荷』(日本経済新聞社・一九六五年)Ⅱ章、上原兼善『鎖国と密貿易』(八重岳書房・一九八一年)四章、徳永和喜「薩摩藩の琉球口支配と天保の改革」(『尚古集成館紀要』七号・一九九四年)など参照。
3. 「琉球産物浪売禁止一件」東大史料編纂所蔵。久世の大坂などの取り締まりに関する文書は『通航一覧統輯』第一、三〇之巻にも載る。
4. 日浦家文書『出雲崎町史』資料編二、四章、六四号文書。「新潟上知之前後松前蝦夷地新潟湊ニ関スル密々諸取調」新潟町会所文書(新潟市立郷土資料館蔵)。
5. 『通航一覧統輯』第一、十之巻・167頁。
- 6・7. 「唐物抜荷一件沢野氏手記」新潟市立郷土資料館所蔵、「北越秘説」「北越秘説付言」(『新潟市郷土資料館調査年報』六集・一九八二年刊にて翻刻。原本も閲覧)『新潟市史』(一九三〇年刊)上巻五章、『新潟市史』(一九九七年)通史編二・六章など。
8. 「近年いつとなく追々相弛所々抜荷物有之趣相聞候ニ付、云々」(新潟市立郷土資料館蔵)。
9. 森須和男「町人を主とした竹嶋一件考」『亀山』一五号、他。
10. 「松前蝦夷地新潟湊ニ関スル密々取調」新潟市立郷土資料館所蔵。
11. 「御家老方手留」(加越能文庫蔵)。また、鍋木勢岐『銭屋五兵衛の研究』(加越能史談会・一九二七年)124頁。なお、銭屋五兵衛は天保四年に蝦夷地シャモンニ場所の昆布場所を買い付けて、一二〇〇石の廻船を新造している(若林喜三郎編『年々留』法政大学出版局・一九八四年)。松前などの問屋から昆布を調達するのではなく、この時期にわざわざ昆布場所を買い付け、廻船新造を行っているのは、薩摩向けの昆布確保のためと考えられ、しかも蝦夷地など北方地域への米売買をも行うことから、富山売薬商など足下にも及ばぬ大がかりな取引を銭屋五兵衛は行おうとしたのではないかと考えられる。ただし、この新造大船はすぐに難破している。この船が富山売薬商の昆布船と違って大船なのは、米を蝦夷地へ運ぶことも重視しているために違いない。なお、天保六年に銭五の宝銭丸は箱館より昆布を積み出帆したが、帆柱を折って三厩に避難寄港している(同上97頁)。
12. 『富来町史』続史料編、一九八六年、981-1199頁翻刻。
13. 『客人の湊、福浦の歴史』、一九九一年、534-582頁。
14. 『輪島市史』史料編4巻、302頁。
15. 住吉文庫『輪島市史』資料編六、一号文書2。
- 16・19・22. 「越中加賀能登湊々高数等取調理ケ條書」金沢市玉川図書館・加越能文庫蔵。
- 17・18. 「乍恐口上書を以御内意奉窺候」『輪島市史』資料編二、545-547頁。『輪島市史』通史編四章六節三。
20. 今井修平「江戸中期における唐薬種の流通構造」『日本史研究』一六九号。
21. 遠藤和子『富山のセールスマンシップ』サイマル出版会・一九九五年、209頁。
- 23・37. 前出注1拙著c論文。
24. 密田章家文書(富山市)。以下、注記のない史料は密田家文書である。
25. 高瀬重雄『北前船長者丸の漂流』(清水書院・一九七四年)95頁。
- 26・36. 柚木学『諸国御客船帳』下巻(清文堂出版・一九七七年)。
27. 藤井文書、高岡市伏木図書館蔵。
28. 「北海検使一件」(深井編『近世越登賀史料』二・桂書房・一九九八年)。
29. 温泉津町所蔵写真による。
30. 布目久三『四方郷土史話』自刊・一九八二年・89頁。
31. 拙稿a論文。

32. 『馬場海運史』馬場汽船株式会社・一九五八年、12・13頁。
  33. 道正弘「馬場家海運の歴史」『バイ船研究』一集。
  34. 前出『馬場海運史』15頁。
  35. なお、道正屋と能登屋は富山の真宗寺院蓮照寺の二大門徒とされる家であるが（前注33論文参照）、この寺を通じた結びつきの存在も考慮される。
  36. 「金銀入口調理帳」密田家文書。
  37. 安政六年「出納留」金盛家文書。
  38. 東岩瀬史料保存会・一九三三年。
  39. 『越中史料』三巻・名著出版・一九七二年、同年条は佐藤屋三右衛門廻船とする。
  40. 前出『東岩瀬史料』116・254頁。
  41. 関川家文書・江差文化センター蔵。
  42. 44～46. 前出『馬場海運史』11・12頁。
  43. 『加賀藩史料』一五編608～610頁。
  44. 「越中加賀能登湊々高数等取調理ヶ條書」金沢市玉川図書館・加越能文庫蔵。
  45. 「北海検視一件」（拙編『越登賀史料』二、桂書房・一九九七年）。
  46. 『石川県史』二巻・992頁所収写真。
  47. 『松前町史』史料編三、183・298頁。
  48. 「諸商売取調理書上申帳」杉本文書・富山県立図書館蔵
  49. 『鹿児島県史』二巻、769頁の統計表。
  50. 「琉球産物御本手品御下高於琉球御払立差引御余勢銀総」島津家文書（東大史料編纂所蔵）。
  51. 『鹿児島県史』二巻、763頁と765頁よりの統計表。
  52. 『鹿児島県史料・成彬公史料』三巻558号。
  53. 57・62. 『鹿児島県史』二巻・四編八章。前注2上原兼善著書。
  54. 「唐物抜荷一件沢野氏手記」新潟市立郷土資料館所蔵。
  55. 59・60. 前出拙著 a・b 参照。符丁については a 論文参照。
  56. 『富山売薬業史史料集』（国書刊行会・一九七七年）下巻・1691頁。
  57. 天保十四年に玉島で、薩摩指宿田良浦船頭松五郎外三人から預かった繰綿代金六六七匁余を高田屋善右衛門が引負う一件が発生している。このため薩摩藩は薩摩船の玉島での繰綿購入を差し止めようとしたため、他の玉島の問屋が引き負い金を弁済して取引再開を願った。この弘化二年（一八四五）二月願書に、「従往古薩州様御物綿並御国中船手売用綿共売渡来り」と記載されており（三宅家文書、『新修倉敷市史』史料近世下、二〇六・二〇七号文書3）、以前から玉島での薩摩船の取引があったことがわかる。
  58. 珂湊市市史編纂室蔵南部屋資料。なお、小泉屋は滑川一の売薬業者である（『滑川町誌』下、148～150頁参照）。
  59. 前出拙著 a 論文参照。
  60. 『甲子夜話続編』（国書刊行会・一九一一年）一卷。続編第一三、『越前町史』上巻。
  61. 『出雲崎町史』海運資料集一と二。
- 追記1、鶴屋と並ぶ伏木の代表的廻船問屋能登屋三右衛門家は、天保七年に当主が密貿易の捕吏奥田某に捕えられるところ、子の三右衛門が身代わりになり、さらに翌年詮議の末、放免されたことが『射水郡誌』上巻（1909年、249頁）に記載されている。残念ながら、出典不明である。
- 追記2、なお、本稿は1994年・1995年度一般研究Cの調査による成果も背景にしている。本稿作成に当り史料閲覧撮影にお世話になった関係各位に御礼申し上げたい。